

研究論文

破局後の恋人たちの関係性

－恋愛イメージの違い－¹

Post-Dating Relationships : Difference in the Images of Love

玉越 勢治、南 あさひ

Seiji Tamakoshi, Asahi Minami

要約

本研究は、破局後の関係性や性別、交際人数によって恋愛イメージに違いが見られるか検討することを目的とした。恋愛イメージは金政（2002）の「恋愛イメージ尺度」を使用し大学生・大学院生 90 名を対象に測定した。結果、破局後に友達に戻ることを肯定的に捉える協力者は、否定的に捉える者より、「大切・必要」下位尺度において有意に得点が高いことが示された。また、男性協力者は女性と比較して「献身的」下位尺度の得点が有意に高かった。さらに、交際人数が 4 名以下より 5 名以上の協力者は、「友達に戻りたい」と回答したことを示した。以上の結果より、破局後友人に戻りたい者は恋愛に対してポジティブなイメージを持つことが示唆された。

キーワード：破局後の関係性、恋愛イメージ、性差、交際経験

Abstract

Post-dating relationships (PDR) refer to the maintenance of social relationships after the end of a romantic relationship. This study aimed to examine the differences in the image of love among PDR. In addition, we considered gender differences and experiences of love. The image of love was investigated in undergraduate and graduate university students ($n=90$: 58 females, 32 males) using the Love Image Scale (Kanemasa, 2002). We compared the favorable group (FG) and anti-favorable group (AG) of PDR based on the seven factors of the Love Image Scale, gender, and experiences of love. The results showed that the score of FG was significantly higher than that of AG on the subscale “important and necessary.” In the comparison of genders, male students’ scores were significantly higher than

1 本論文は第 2 著者が平成 29 年度に帝塚山学院大学人間科学部心理学科へ提出した卒業論文のデータを基に第 1 著者が再分析を実施し、第 2 著者と共に全面的に改稿したものである。第 2 著者の提出した卒業論文に記載されている考察は脚注として明示する。再分析を行っているため、図は全て作りなおされたものである。

those of female students on the subscale “devoted.” Additionally, participants with many romantic experiences had significantly more favorable views about PDR than participants who did not. These results suggest that the participants in favor of PDR have positive images about love.

Keywords : post-dating relationships, image of love, gender differences, romantic experiences

1 序論

1-1 はじめに

「恋愛とは、恋人と構築・維持している関係、および、関係構築前や関係崩壊後も含むその者との関係によって生じる心理・感情・行動の総称」と恋愛心理学の書籍に記されている（高坂, 2016）。恋愛の定義は難しく、仮に神経生理学的な基盤が発見されたとしても、主観的な恋愛感情について、他者が客観的に定義することは困難であると考えられる。また、恋人という関係そのものの定義も時代や文化によって様々であろう。同様に、恋人の定義は次のように記されている。「恋人とは、直接接合・交流できる異性であり、恋愛関係を構築・維持することに本人とともに同意している者」（高坂, 2016）。この文献では、インターネット上でしか関わりのないものや、すでに亡くなっているものは恋人に含まないと定義している。また恋人の対象者を異性と限定していることについて、性的マイノリティについての先行研究の知見が少ないため、現段階では論ずることができないと述べられ、心理学研究の対象者として無視してはいけない旨が改めて記載されている。このように恋愛に関する心理・感情・行動あるいは他者との関係性は、性自認も含め極めて主観的な体験であるとも言え、捉え方や感じ方に万人が納得する定義は難しいのが現状である。

松井（1990）は恋愛研究を「恋愛に対する態度や認知」、「異性選択と社会的交換」、「恋愛感情と意識」、「恋愛の進行と崩壊」の4つに分類している。本研究は恋愛や恋人の定義は高坂（2016）に則りながら、恋愛関係崩壊後の関係性と恋愛に対する意識の違いを検討するものである。

2014年7月に首都圏在住の中学1年生～大学4年生272名（女性186名、男性86名）を対象にした「恋愛に関するアンケート調査」の結果によると、「現在、恋人はいますか？」の質問に対し、大学生では31.7%が恋人がいると回答している（コアネット教育総合研究所, 2014）。恋人がいると回答した割合は中学生13.3%、高校生が10.4%と1割前後であるのに対し、大学生では3割程度と増加が見られ、年齢を重ねるごとに恋愛経験が豊かになっていくのだと考えられる。一方で、告白されたことがあると回答した割合は中学生の時点で既に66.9%、大学生では71.9%にのぼり、恋人のいる割合よりもはるかに多い。少なくとも学生にとって、告白は成就し愛は永遠に続くということはなく、どこかの時点で失恋や破局を迎えるのだと考えられる。高坂

(2016, 2014) によると恋人のいる大学生のうち 36.4% は 8 カ月で恋愛関係が崩壊、すなわち失恋を迎えるというデータが報告されている。破局後の恋人たちには永遠の離別が待っているのか、あるいは関係性は何らかの形で継続していくのだろうか。

1-2 失恋と Post-Dissolution/Dating Relationship (PDR)

失恋は、恋愛関係を構築したのちに関係が終了する「離愛」と、恋愛関係の構築なしに相手への恋愛的好意が消失した「片思い」に分類され、「離愛」は別れの主導権の観点から「自ら別れを告げた離愛」、「相手に別れを告げられた離愛」、「明確ではない離愛」に細分化できる(加藤, 2006)。離愛についての実態調査として、牧野・井原(2004)によると、別れの主導権では自分が別れを切り出した男性は 36% であるのに対し、女性では 60% であることから、女性の方が別れの主導権を有している場合が多いことが示されている。また、別れを切り出した理由では、男女共に「価値観の不一致」が最も多いが、男性では「他に好きな人ができた」が、女性では「相手を嫌いになった」が多くなっており、別れる理由にも男女差があることが示唆されている。

一方で、離愛として恋愛関係を解消したとしても、相手との関係が完全に切れてしまうわけではなく、時には友人関係が継続して維持されることも少なくない。恋愛関係を解消した相手のことを PDR (Post-Dissolution/Dating Relationship) と呼び、増田(2001 a) は、PDR を「恋愛関係終結後に同パートナー同士で継続された対人関係、特に結婚前の元恋人同士による友人関係」と定義している。山口(2011) は、PDR について狭義に分類し、離婚後の関係を Post-divorce relationship、結婚に至らなかった恋愛関係崩壊後の関係を Post-dating relationship と呼んでいる。本研究では主に後者について PDR という呼び方を使用する。山口(2011) は PDR に対し、恋人関係や異性友人関係との質の違いについて検討を実施した。結果より、恋人関係は PDR や異性友人関係よりも交際内容のレパトリーが広いが、一方で行為の排他性については恋人関係と同様に PDR も高いことが示されており、PDR は恋人関係とも異なる関係性であることが示唆されている。

また、PDR は社会的に望ましい関係とは認識されず、精神保健上不健康なものと位置づけられ、当事者は不当に苦悩を抱えているのではないかと指摘されている(山口, 2011)。はたしてそうだろうか。当事者たちの恋愛に対するイメージや価値感、PDR に対して好意的な者とそうでない者との違いがあるのではないだろうか。人によって元交際相手との破局後の関係性は様々で、PDR のように友人として良好な関係を続ける者もいれば、逆に一切の連絡を絶ち赤の他人として関わりを避ける者もいるだろう。これには恋愛に求める価値や考え方の違いが背景にあるのではないだろうか。本研究では次節に示す恋愛イメージ尺度を用いて、調査を実施し検討を試みる。

1-3 恋愛イメージ尺度

「恋愛イメージ尺度」とは、金政（2002）によって開発された恋愛に対するイメージを測定する尺度である。この尺度は、自由記述による予備調査の結果得られた47項目について、大学生449名を対象とした研究1における因子分析より、「大切・必要」「刹那的・付加価値」「相互関係」「独占・束縛」「衝動・盲目的」「献身的」「成長」の7つの因子に分類したものである。さらに大学生460名を対象にした研究2においても、28項目について因子分析を実施し、同様の7因子が抽出されている（以降それぞれの因子を下位尺度と呼ぶ）。下位尺度ごとの信頼性を示す α 係数は.63-.85であった。「献身的」下位尺度の信頼性がやや低かったが、他の尺度は十分な信頼性を有するものであった。妥当性について、本尺度と愛着スタイルの関連が検討され、構成概念妥当性が確認されている。

この尺度は恋愛という現象自体への態度を回答するものであり、そのため特定の相手に対する愛情を測定する必要はなく、恋人など特定の相手がいない場合でも回答しやすいことが特徴である。また、この尺度は大学生を対象とした調査によって作成されているが、中学生以上であれば回答可能とされている。以上の理由より破局や失恋状態であっても恋愛に対するイメージを測定できると考え、本研究に用いることとした。

1-4 目的

片思いや離愛を含む失恋体験は、時に自殺や殺人の要因となり得るものであり、また近年では、失恋の復讐として交際時に撮影した相手の裸や性交時の写真をネット上などに拡散させるリベンジポルノも問題になっている。そのため、失恋からいかに立ち直るか、あるいはどのように失恋からの立ち直りを支援していくかは、社会的にも重要なテーマである（高坂，2016）。前述したように、PDRは恋愛関係とも異性友人関係とも質の異なる関係性であり、別れた恋人と何らかの関わりを維持することは、未練とも関連し、失恋からの立ち直りを遅らせるのではないかと懸念もされている（山口，2011；高坂，2016）。しかしながら、失恋を経て、相手と良好な関係を構築できるのであれば、それは関係の「修復」と呼ぶことが可能であり（増田，2001b）、ポジティブな側面があるとも考えられる。

このように、PDRのポジティブな側面やその背景にある当事者の恋愛に対する価値感や考え方についての検討はなされていない。そこで本研究は結婚に至る前の離愛経験のある大学生を対象とし、失恋後に友人関係に戻ること（PDR：Post-dating relationship）に肯定的な者とそうでない者の恋愛イメージの違いについて検討を試みる。また、牧野・井原（2004）が示唆するような性差と、恋愛経験（過去の交際人数）との関係も検討することを目的とする。

2 方法

2-1 調査日時および場所

本研究は 2017 年 12 月 11-18 日の間に T 大学の教室で調査を行った。

2-2 調査協力者

調査に協力したのは大学生 89 名（男性 38 名、女性 51 名）、大学院生 1 名（男性 1 名）の計 90 名であった。平均年齢は 21.0 歳（男性 21.0 歳、女性 21.0 歳）であった。書面への記入をもって調査協力への同意を確認した。

2-3 質問紙

質問紙は表紙を合わせて 4 枚綴りで、大きく分けて設問 1-3 より構成されており、全部で 33 項目の質問を設けた。

設問 1 は交際経験の有無を回答させた。本研究では、過去に交際経験があり、且つ破局経験があるものを対象としているが、協力者に不快な思いをさせないように、交際経験が無い場合や破局の経験が無い場合は、破局後の関係を問う設問 2 の回答を省き設問 3 へ進むようページ構成を工夫した。

設問 2 にて破局後の関係性について 3 つの質問に回答させた。設問 2 (1) では「過去の交際人数」について人数を記入させた。設問 2 (2) では「交際相手と破局後、友達に戻りたいと思うかどうか」という質問について 5 件法で回答を求めた。設問 2 (3) では「どちらから別れを切り出したか」について、自分から、相手から、どちらもとも言えないの 3 つの選択肢より回答させた。これらの質問に先立ち、過去に交際相手が複数いる場合は相手を限定しないよう教示文に記載した。

設問 3 では協力者の恋愛観、もしくは恋愛に対するイメージを調査するため、金政（2002）によって作成された「恋愛イメージ尺度」を用いた。本尺度は 7 つの下位尺度より 28 項目で構成されており、7 件法で回答させるものであった。尺度得点として、下位尺度ごとの平均評定値を算出した。

2-4 手続き

本調査は研究者が質問紙を複数の協力者に配付し、その場で回答を得て回収する集合調査の方式で実施した。研究者は質問紙が 4 枚綴りになっているか確認させ、表紙に記載されている注意事項を読んでわからないところがあれば質問してもらうようにアナウンスした。準備ができ次第回答を始め、回答し終わったものからその場で提出させた。回答にかかる時間制限は設けなかった。結果の統計的分析は大久保・岡田（2016）を踏襲し、帰無仮説検定における有意水準は 5%

とした。

3 結果

3-1 記述統計と信頼性係数

本調査は研究者と調査協力者の対面による集合調査で実施し、回収率は100%であった。交際経験の有無を聞く設問1について協力者90名のうち交際経験ありと答えたのは75名(女性43名、男性32名)、無しと答えたのは残りの15名(女性8名、男性7名)であった。割合にすると本調査協力者の83.3%の大学生が交際経験を有することとなる。次に設問2における交際経験を有する75名のうち、破局の経験を有するものは75名中68名(女性39名、男性29名)であった。3章2節以降では主にこの68名を対象に結果の分析を実施する。

設問3では、金政(2002)の尺度を用いて恋愛イメージについて回答を求めた。協力者90名における全ての項目の信頼性係数(クロンバックの α)は.80であり、十分な信頼性を有するものと考えられる。

3-2 破局後の関係性と恋愛イメージについて

設問2の(2)における「あなたは交際相手と破局後、友達に戻りたいですか?」の質問に対する回答として「全くそう思わない」と回答したものが10名、「そう思わない」が10名、「どちらともいえない」が25名、「そう思う」が20名、「非常にそう思う」が3名であった。「どちらともいえない」と回答した人数が最も多く、残りは肯定側と否定側で分け合う結果となった。そこで以降の分析は「どちらともいえない」と回答した25名を除外し、肯定側の23名と否定側の20名を対象に、恋愛イメージの下位尺度ごとに比較を実施する。

図1は交際相手と破局後友達に戻ることに肯定的な回答をしたものと、否定的な回答したものの恋愛イメージ尺度得点の比較を示す。それぞれの結果を、7つの下位尺度ごとに対応のないt

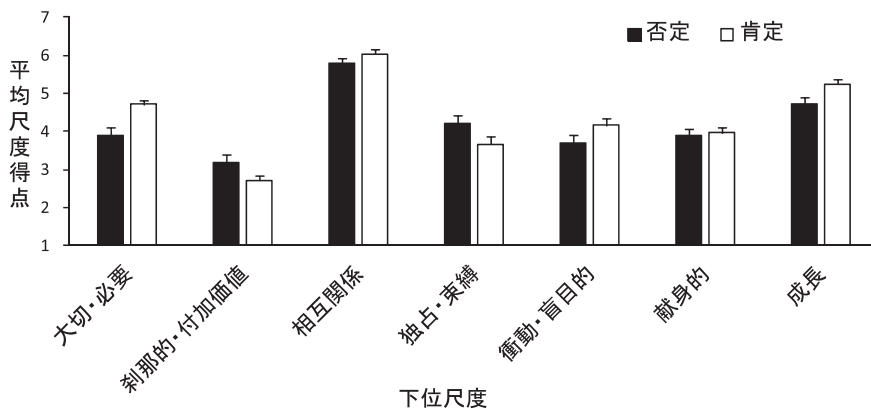


図1 破局後の関係性による恋愛イメージの比較。エラーバーは標準誤差を示す。

検定（以下 Welch 法を使用）で比較した結果、「大切・必要」下位尺度のみ有意な差が見られた（否定： $M = 3.92$, CI [3.71 4.12]；肯定： $M = 4.71$, CI [4.59 4.83]； $t(29) = 2.31$, $p = .03$, $\Delta = .59$ ）。

3-3-a 性差と別れの主導権

設問 2 の (3) における「どちらから別れを切り出しましたか？」の回答を性差に分けて算出した所、「自分から」と回答した女性 25 名に対して男性は 8 名であった。「相手から」と回答した女性 8 名に対して男性は 14 名であった。「どちらともいえない」という回答は女性 6 名、男性が 7 名であった。牧野・井原（2004）が示す、女性の方が別れの主導権を有しているという傾向が本研究結果からも見られる。以上のデータより「どちらともいえない」を除外し 2×2 のクロス集計について χ^2 検定を行ったところ、有意な差が見られた ($\chi^2(1) = 8.52$, $p < .001$, $\phi = .39$)。

補足的ではあるが、友人に戻りたいかという質問に対して肯定・否定と性別のクロス集計について χ^2 検定を実施したが有意差は認められなかった。

3-3-b 性差による恋愛イメージの違い

図 2 は恋愛イメージ尺度の得点を男女で比較したグラフである。男女共に「相互関係」の得点が最も高く、「刹那的・付加価値」の尺度得点が最も低かった。それぞれの結果について、7 つの下位尺度ごとに対応のない t 検定を行い性別の比較を実施した結果、「献身的」下位尺度のみ有意な差が見られた（女性： $M = 3.58$, CI [3.39 3.76]；男性： $M = 4.32$, CI [4.18 4.45]； $t(13) = 2.34$, $p = .02$, $\Delta = .85$ ）。

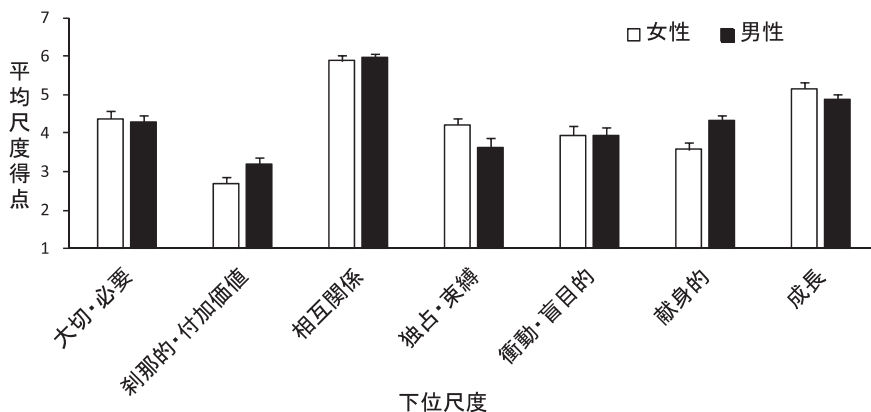


図 2 性別による恋愛イメージの比較。エラーバーは標準誤差を示す。

3-4 交際経験の差と破局後の関係性

図 3 は破局後の関係性について「どちらでもない」を除外した、肯定・否定それぞれの回答者と交際経験人数の比較を示す。交際人数が 5 名以上では PDR に対して否定的な者はいなかつ

破局後の恋人たちの関係性

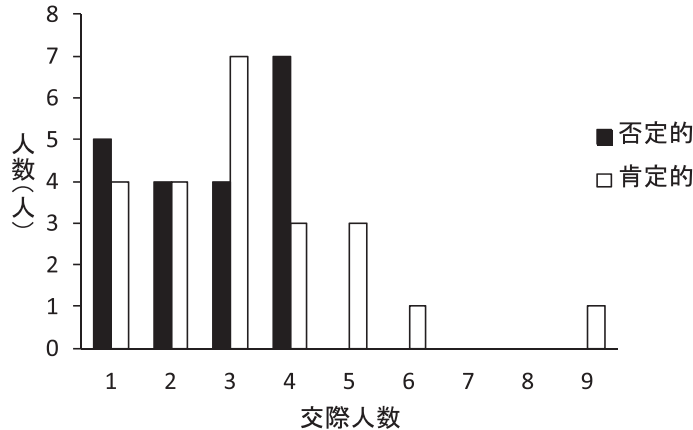


図3 過去の交際人数と破局後の関係性.

た。やや恣意的ではあるが、過去の交際人数が4人以下と5人以上に分類し、否定・肯定的意見の回答者数の違いについて χ^2 検定を行ったところ、有意な差が見られた ($\chi^2(1) = 4.92, p = .03, \phi = .34$)。本データについて男女の違いを検討したが有意な差は認められなかった。

4 考察

本研究は、恋愛関係破局後の関係性と恋愛イメージ、恋愛経験や性別によって恋愛イメージにどのような違いがあるか検討することを目的として実施し、以下に結果と対応づけながら考察する。

4-1 破局後の関係性による恋愛イメージの変化について

破局後の関係性、すなわち PDR について肯定的な回答をした 23 名と否定的な回答をした 20 名の恋愛イメージの違いを比較したところ、肯定側の方が否定側より恋愛イメージの「大切・必要」下位尺度で得点が有意に高かった。この下位尺度は「恋愛は私の心の支えだと思う」「恋愛をすると自分に自信がもてるようになる」などの項目より構成されており、恋愛をポジティブなものであると価値づけていることを示唆する。因果は定かではないが、恋愛関係が崩壊しても友人関係を継続させようと志向する者は、恋愛についてポジティブな要素を見出していると考えられる。本研究の主な分析対象者はこの「どちらともいえない」という回答した者を除外しているため、より安定的に肯定・否定どちらかの価値観や社会的スキルを有する者を対象にしたと考えられる。

一方で、破局後の関係性について最も多かったのは「どちらともいえない」と回答した 25 名であった。大学生になると中・高生に比べて恋愛経験が増加するため、その時の付き合い方や相手によって関係性が変わるのではないかと考えられる²。石本・今川 (2003) では、失恋後に経

験する心理的变化について、肯定的な因子と否定的な因子を見出しているが、そこには「性別」「恋愛段階」「別れの原因」「交際期間」「別れてからの期間」のいずれも影響を及ぼしていないことが示されている。この結果は失恋体験について、印象に残るものと、そうでないもので、体験した当事者にとっての影響が様々であることが原因と指摘されている。本研究では回答する際、相手を特定しないよう教示を与えた。それによって複数の相手を想定した場合、それぞれで対応が変化するため「どちらともいえない」という回答に偏った可能性がある。また「どちらともいえない」の回答が多い理由として破局の原因も関係すると考えられる。牧野・井原（2004）の別れを切り出した理由について、男女共に「価値観の不一致」が最も多いと示されている。価値観の不一致が積極的に元恋人を遠ざける理由とはなりづらいと思われるが、気まずさのようなものは残るため、「どちらともいえない」のではないかと考えられる。

4-2 性別と破局後の関係性、恋愛イメージについて

牧野・井原（2004）によると、自分が別れを切り出した男性は36%であるのに対し、女性では60%であることが示されている。本研究の結果も自分から別れを切り出した女性は39名中25名と64%を示し、男性は29名中8名と27.5%を示した。先行研究より、さらに女性が別れの主導権を有している場合が多いことが示されている。性別による恋愛イメージ尺度の比較においては「献身的」下位尺度にのみ有意差が見られた。この下位尺度は「恋愛とは相手のためなら何でもできる事である」や「恋愛とは相手のためにどれだけ自分を犠牲にできるかだと思ふ」などの項目より構成されている。この結果より、男性の方が恋愛に対して献身的なイメージをもつ反面、別れは先方から切り出される、というやや不憫な結果であると言えよう。もしくは女性の方が別れの主導権を握っている場合が多いため、男性は相手に対して献身的になるとも考えられる²。

4-3 交際経験人数の差による破局後の関係性の変化について

交際人数の検討では、交際人数が4人以下と5人以上に分け、失恋後の関係性について χ^2 検定を行った結果、有意差が見られた。図3からも明らかなように、交際人数が5名以上の協力者に破局後の関係性に否定的な回答を示す者はいなかった。交際人数が多い方が破局後の関係性に肯定的な考えを持っていることが示唆されるが、これも因果関係は不明である。恋愛に対して、「大切・必要」尺度が示すような恋愛へのポジティブな価値感を持っている者は、破局後の関係継続についても肯定的な考えを持ち、さらに交際人数も多いという繋がりが生じていることが伺え

2 第2著者の表現を活かすため、南（2018）の考察を部分的に引用した
南 あさひ（2018）. 破局後の恋人たちの関係性－恋愛イメージの違い－. 帝塚山学院大学人間科学部卒業論文 未公開

る。

この結果は交際人数が増えることによって、失恋に対するネガティブな側面に慣れなどが生じるという解釈もできる。しかしながら図3では交際人数が増えることによる否定的な回答をした人数の減少は見られず、むしろ横ばいを示す。恋愛に対してポジティブな価値を見出しつつ、破局を恐れない特性を持った人物が、結果的に交際人数を増加させている可能性がある。加藤(2013)によると、青年における失恋の痛手から回復に要する期間は4カ月以内とする回答が全体の半分以上を示している(女性:58.8%、男性:72.1%)。大学生は幾度となく失恋しては回復し、新たな恋を模索していることが伺える。

4-4 まとめ

現代の大学生で現在進行形で交際している者は約3割程度しかいないと報告されている。幾度かの失恋による苦い経験を通じて、恋愛に対するイメージはポジティブなものになる可能性が示唆された²。青年には恋愛に対して良いイメージを持ち、破局を恐れず積極的に恋愛をしてもらうことが期待される²。

引用文献

- 石本奈都美・今川民雄(2003). 青年期における恋愛崩壊による心理的变化に影響する要因について. 対人社会心理学研究, 3, 39-45.
- 金政祐司(2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証—親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から—対人社会心理学研究, 2, 93-101.
- 加藤 司(2006). 失恋の心理 齊藤 勇(編)イラストレート恋愛心理学: 出会いから親密な関係へ(pp.113-122) 誠信書房
- 加藤 司(2013). 浮気の行動学 大坊郁夫・谷口泰富(編)現代社会と応用心理: 2 クローズアップ 恋愛(pp.44-51) 福村出版
- コアネット教育総合研究所(2014). 恋愛に関するアンケート調査. http://core-net.net/wp-content/uploads/2016/11/in_love.pdf. (閲覧日 2018年9月1日).
- 高坂康雅(2014). 大学生の恋愛関係の継続/終了によるアイデンティティの変化. 青年心理学研究, 26, 47-53.
- 高坂康雅(2016). 恋愛心理学特論—恋愛する青年/しない青年の読み解き方— 福村出版
- 牧野幸志・井原諒子(2004). 恋愛関係における別れに関する研究(1): 別れの主導権と別れの季節の探求 高松大学紀要, 41, 87-105.
- 増田匡裕(2001 a). 以前の恋人との友人関係(PDR)と新しい恋愛関係の交渉と葛藤についての探索的研究: 対人関係の正当性に関するフォーク・サイコロジー 日本社会心理学第42回大会発表論文集, 250-251.
- 増田匡裕(2001 b). 対人関係の「修復」の研究は有用か 対人社会心理学研究, 1, 25-36.
- 松井 豊(1990). 青年の恋愛行動の構造. 心理学評論, 33, 355-370.
- 大久保衛亜・岡田謙介(2012). 伝えるための心理統計—効果量・信頼区間・検定力— 勁草書房.
- 山口 司(2011). 恋愛関係崩壊後の関係における交際内容に関する研究—Post-dating relationshipと恋愛関係、異性友人関係との比較— 北星学園大学大学院論集, 2, 47-59.